

ダマスキオス『第一の諸始原についてのアポリアと解』

第 I 卷第 2 部 (R. I, 30-41)

堀 江 聡

はじめに

プラトンによって創設されたアカデメイアの最後の学頭ダマスキオス (紀元後460年頃生れ, 538年以降没)⁽¹⁾の主著『第一の諸始原についてのアポリアと解』の第 I 卷第 2 部 (R.I, 30-41) を以下に訳出する。底本には、ビュデ版⁽²⁾を用いたが、リュエル版⁽³⁾も参考にした。翻訳としては、上記ビュデ版の対訳の他、ガルベリヌの仏訳⁽⁴⁾を参照した。＜ ＞内はギリシア語原文上の補足箇所の訳出であり、{ } 内は、文意を掴むための訳者による補いである。改行および章分けは、ビュデ版のギリシア語テキストにしたがった。ギリシア語原文にはないが、ビュデ版訳者の章ごとの小見出しを採録し、各章の冒頭にゴチック体で附加した。[R+数字]により、リュエル版のページを併記した。

(1) Ph.Hoffmann, *Damascius*, in: *Dictionnaire des philosophes antiques* II, éd.R.Goulet, Paris, 1994, pp.541-563

(2) Damascius, *Traité des premiers principes. De l'ineffable et de l'un*, texte établi par L.G.Westerink et traduit par J.Combès, Paris: Les Belles Lettres, 1986²

(3) Damascius Successor, *Dubitationes et solutiones de primis principiis, In Platonis Parmenidem*, pars prior, ed. C. Ae. Ruelle, Amsterdam, 1966 (Paris, 1889)

(4) Damascius, *Des premiers principes. Apories et résolutions*, Introduction, notes et traduction du grec par Marie-Claire Galpérine, Lagrasse, 1987

[2.4². 三つの仮定]

[R30 承前]⁽⁵⁾だが、おそらく非理性的魂は自己自身を動かすというしかたではなく、自己自身から外部のものへと動かされ、いわば突進するというしかたで動かすという意味で自動的なのであろう、なぜなら、自己自身によって動くのではないが、自己自身から動くからである。じっさい、偉大なシュリアノスの周囲のひとびともまた、『法律』篇や『ティマイオス』篇での自動者をそのように、より一般的な意味で言われたものと解すべきだと考えたのである。じっさい、植物は動かないとティマイオスが述べたのはそういう理由による、つまり、場所上の運動をする獣が与えるようには、植物は自動的な魂に与らないからである。しかし、すべて動かされるものは必然的に、自己自身によって動かされるか、他のものによって動かされるかである、そして、後者には二通りあって、不可分の活動や本当に非理性的な活動についてそうだとわれわれが言うように、上位のものによって動かされるか、任意のものによって動かされるかである。というのまたしかに、{非理性的魂は} そのうちにあるものによっては動かされないからである、なぜなら、それは身体であるから、逆に、魂によって動かされるのである。

[R31] では、おそらく諸活動は実体によって動かされるのであり、非理性的魂が自動的であるというのは、実体が己固有の諸活動を産み出すことができるという意味なのであろう。否、第一に、それはどの実体にも、他動的と言われる実体にすら共通のことであろう。というのもじっさい、火もまた己の不可分の諸活動を産み出す実体という意味では自動的であるし、

(5) 拙訳「ダマスキオス『第一の諸始原についてのアポリアと解』第Ⅰ巻第1部(R.I, 1-18)」は、『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』34, 2002年, 153-177頁に、同書第Ⅰ巻第2部(R.I, 18-30)は、『文部科学省科研費基盤研究(B)1「プラトン主義の伝統における継承と変容——思想の時代超越性と時代依存性の研究——」報告書』(代表者:小浜善信)2003年に掲載されている。

土くれも斧もなんであれ活動することができるものは、すべてそうである。なぜなら、つねに実体から固有の活動が現れ出てくるからである。したがって、上の説はこのように述べてみると正しくないことになるだろう。他方、これこれ様の形相は基体のうちにあるというのが前提であるから、それをそれ自体で活動するものとおそらく解するべきでなく、それが内在する基体とともにと解するべきであろう。なぜなら、そのあり様に応じて活動するからである。したがって、視覚を分散させるものが白さではなく、性質なき物体でもなく、両者を併せたものであるように、感覚的活動は身体なき感覚のそれではなく、身体である感覚器官のそれでもなく、一つの結合実体としてそれら双方からなるもの——質料と形相から合成された実体のように——の活動なのである。というのは、感覚器官は感覚がそこに内在するが、感覚が感覚器官を使用しないかぎり、感覚の道具ではなく基体だからである。もし使用するのであれば、道具をも動かすために、道具の前に自己自身を動かすことであろう。しかるに現実には、感覚は基体とともに存立したのであり、いかなる離存的活動ももたないのである。であるから、活動するのは両者併さったものであるが、しかし他方、ちょうど鑿の活動がかたちにしたがって現れ、視覚を分散させる白い物体の活動が白さにしたがって現れるように、活動は形相にしたがって現れるとしよう。

[2.4³. 提案された解決]

それでは、結合体のうちでなにが動かすものであり、なにが動かされるものなのであろうか。魂が動かし、肉体が動かされるのではないか。しかし、そうすると再び、動かす魂と動かされる肉体とが離れ離れにあることになり、動かされる活動の前に動かす活動を独立にもち、動かされるものの前に、動かす魂があることになってしまうだろう。したがって、一方に動かすもの、他方に動かされるものというふうに立てるべきではなく、一なる動物となったもの、すなわち、感覚の能ある肉体ないし受肉した感覚が、その自動的にみえる活動を行なうのである。というのも、もし結合体

たる動物の実体なるものがあるならば、当然のこと、動物全体に適合し、それ自体になにか全体的であるような——そのうちに、非物体的なものも物体的なものも同時に混合されているのがみられるような——結合的活動をも <立てるべきである>、ちょうど、視覚を分散させる活動に [R32] 両者が内在するように。それゆえにまた、われわれは白い物体から両方のしかたで作用を受ける、つまり、物的には感覚器官において分散を蒙り、非物的には対象そのものを認識するかのように、情態を把握するのである。それゆえ、作用者が結合的であるように、受動者である視覚も、非物体的視覚能力と基体としての肉体からなる、なにか結合的なものなのである。したがって、視覚能力、一般的に言って感覚には、それだけでは活動しないが——なぜなら、それだけでは存立すらしないから——、肉体に生ずることによって、なにか一層価値ある性質と照明で肉体を性質づけ、全体を見かけの自動者として完成する自動性の形相が内在していると措定すべきである。だが、なにゆえに見かけなのであろうか。それは、動かし、動かされるものが不可分で同一のものではなく、ある面では協調するもの、お互いから切り離された諸実体（たとえば、理性的魂と動物とか、殻状の動物と気体の動物とか、後者と光体の動物）のように、動かすものと動かされるものが別々だからである。というのもじっさい、このような結びつきにおいては、一方が基体で、他方が基体のうちにあるものではないのだから、動かすものと動かされるものは別々だからである。だが、結合的形相がこのようなものであるならば、各々は別個には活動せず（というのは、存立すらしないから）、その結合状態で一方が動かし、他方が動かされるということもないからである（さもなくば、それらは活動において再び異なることになり、したがって、また存立においても異なることになるだろうから）。だが、両者の併さったものが、一方のもの、たとえば形相によって動かされるというべつの型の自動性もある。そこでまた、それが動かすものであると思われることにもなるのであるが、一方が他方によって動かされるからではなく、両者の併さったものがそれにしたがって動かされるこ

とによるのである、ところで、<自己自身によってであるか>、他のものによってであるかのどちらかである。もし後者であるならば、高次のものによってであるか、低次のものによってであるかとなり、同じ議論が繰り返されるだろう。他方、自らによってであるならば、同じものが動かし動かされるものとなり、これは部分なく結合なきものにしか当てはまらないだろう。あるいは、その自動者が真正のものではないように、自らが自らによって動かされるとか、自らを動かすというのも真実でなく見かけである、というのも、結合体がそれによって動かす一なる単純なものがあって、これは動かすものとして一であるが、他方、それにしたがって動かされるものどももあるからである。そして、それにしたがって統合体全体が動かすものは形相であって、その全体のうちには、それにしたがって動かされるものがある。全体の⁽⁶⁾いわば諸要素の相互分与によって、統合体はそれぞれにしたがってある。その結果、全体は動かし動かされる。がしかし、全体にしたがって自己自身を動かし、動かされるのではなく、[R33] 魂にしたがって動かす一方、肉体にしたがって動かされるのである、だが、魂によってでもなければ、肉体によってでもない。

[2.4⁴.「それによって」と「それにしたがって」]

「それによって」と「それにしたがって」が異なることは容易に明らかになる。なぜなら、運動には二種類あって、一つは動くものに生じ、その情態となるものであり、もう一つは、外側にあって前者の運動を付与するものである。したがって、{運動するものは} 後者の運動によって動かされ、前者の運動にしたがって動かされる。というのは、もし仮にその運動によっても動かされるとしたならば、その運動もまた己から、己によってともかくも動かされるものに、なんらかの運動を付与することになるだろう。すると、この {新たな} 運動は情態となり、{新たに} 動かされるも

(6) ビュデ版48頁2行目のεἰδουςは削除する。

のがそれにしたがって動かされる運動となるだろう、そうしてわれわれは無限に進んでいくことになるだろう。

この議論は吟味すれば、生命についても同様に当てはまる。つまり、それによって生命を与えられるものに生命を付与し、生命をつくり出す生命もあれば、この生命によって生命を与えられたものが、それにしたがって生きる生命もあるのである。というのも、もし後者の生命も生命をつくり出すのであれば、べつの生命を与えることになり、そのようにして無限に進むだろう。さらに、自動性の形相もこの通りであり、自動者にみえるものがそれによって自動者となるものもあれば、それにしたがって自動者とみえるものもある、そして、後者は自動性の情態であり、{自動性を} 分有したものと不可離である。自動的な自然——魂なのであるから——もまた、このような生命である。そして、魂にも二通りあって、一方は産み出す魂であり、他方は生命体がそれにしたがって本質を与えられる魂である。この生命体はまた、己自身の内側から動くようにみえるが、われわれが生命原理と呼んでいる、それにしたがって動くものは内在するが、それによって動かされるものは内在しない。

[2.4⁵. 自動性の諸段階]

おそらくひとは以上のことを容認したうえで、これらは植物にも無生物にも共通であると思うだろう。というのもじっさい、土くれは大地に向かって内発的に動くし、植物も同様だからである。というのは、植物のうちには植物的魂があって、それにしたがって植物は自らを養い、成長し、類似のものを産むからである。さらに、また非理性的なものどもも、理性的な動物も同様なしかたである。したがって、自動的でないものはなにもないことになる。そこで、このひとに対してわれわれは、あらゆる自然的形相も植物的形相も、どの動物も内発的に動くが、どの運動でもってというわけではなく、場所的な運動をするときであると答えよう。なぜなら、これは自動的であることが明瞭な運動だからである。だから、この運動に

関して内発的に動かない他のものどもを、われわれは他動的と呼ぶのである。じっさい、もし理性的な魂がそれにしたがって自動的であるものでもって自動者をわれわれが判別するのであれば、非理性的動物すら自動的とはみえないであろう。というのも、非理性的動物は自己自身へと還帰しないのが本性であるから。たとえば、視覚は自己自身を見ないし、表象力も己が表象しているとは表象しないし、気概も欲求もその活動全体をすっかり外的な欲求対象へと向けている。まさにそれゆえに、われわれはそのような自動者は内側から [R34] 外側へ活動するのであって、己自身へと円環的にではなく、たんに直線的に活動すると述べたのである。というのは、直線的に伸びた基体としての肉体から不可離であるゆえに、それがその生の形相だったからである。じっさい、内在する本性にしたがって火は上に、土は下に運動するし、植物的な魂——これもまた内在するのだが——にしたがって植物も自らを養い、成長し、類似のものを産み出すのと同様に、獣も自らの自然的・植物的肉体に内在する欲求的で、動物の形相と本質的に結びついた生命にしたがって、ひたすら非理性的な自動性を実現するのである。だが、もしひとが獣も理性をもっているような活動を顕し、理性的であるようだとして、獣も第一の自動性を分有し、それゆえ自己自身に還帰する魂を有すると想定したならば、おそらくわれわれは、本質上ではなく、分有、しかも最も漠然とした分有によってであるという留保条件をつけて、獣をも理性的とするそのひとに同意しうるだろう。それはちょうど、ひとが理性的な魂をも、つねに誤ることのない共通想念を顕しているかぎりにおいて、分有によって知性的であると呼びうるようなものである。

いずれにしても、離存的なものを幅のあるものとみなすことにしよう、つまり、場合に応じて離存性の度合いが異なるわけは、理性的形相のような完全に離存的なものと、性質のように完全に非離存的なものが両端にあるからだと主張しよう。そして、中間には非離存的なものの側に自然があって、離存的なものをかすかに反映しており、離存的なものの側には非理性的な魂がある。というのは、非理性的魂はなんらかのしかたで基体を離

れてそれ自身でも存立するようにみえるからである。それゆえに、それが自動的であるか、他動的であるか議論の余地がある。自動性の痕跡が大きいからである。もっとも、自己還帰するがゆえに、基体から完全に切り離されている真正の「自動者」ではない。植物的な魂はほぼ中間にあるゆえに、ある人々にはなんらかの魂であると思われ、またある人々には自然であると思われている。それはともあれ、これについては他の箇所ですらに吟味すべきであるが、いまは以上語られたことでよしとおこう。

[2.5. 真の、あるいは理性的な自動者]

目下の主題に立ち返ることとしよう。さて、他動者と混合した自動者が[R35] いかにして第一のものたりうるだろうか。というのは、それは自己を存立させるでもないし、真に自己を完成させるでもないものであり、いずれのためにも他のなにかを必要とするからである。それに先立って真なる自動者がじつに存在するのである、それはまた感覚が、否むしろ、現象の明証性、人間という自動者が証するごとくである。そして明らかに、そこからいまわれわれは、あらゆる理性的形相を捉えることになるのである。というのも、諸事物の特性をより包括的にとらえることが課題だからである。

[2.6 不動の原因]

それでは、いったい勝義の自動者は始原であって、いかなる高次の形相も必要としないのであろうか。動かすものは本性上、動かされるものにつねに先行するのであり、一般的に言って、対立者のない形相はすべて、対立者と混じった形相に先立ってそれ自身で存立し、混じり気のないものは混合したものの原因なのではないか。というのは、他のものと本質的に結びついているものは、他のものの活動と混合した活動を有するのであり、その結果、少なくともそのような状態にあるものは、単独で存在することすらないのだから、自己自身を動かすだけのものにはせず、己を自動者、

つまり動かすものであると同時に動かされるものにするだろう。動かされるものではなく、動かすものであるためには、形相もすべて単独であらねばならない。物体のように動かされるものだけがあって、動かすだけのものが、その双方であるもの「動かし動かされるもの」に先立って存在しないのは不合理ではないか。じっさい明らかに、動かすだけのものは優れている、なぜなら、自動者ですら、動かされる側面の自己よりも、動かす側面の自己の方が優れているからである。したがって、不動の起動者が第一のものであればならない、動かさず動かされるものが第三のものであり、それらの中間に自動者——われわれの主張では、それは己を起動者としてもらうために動かすものを必要とする——があるのだから。もしお望みとあらば、自己自身を動かすことができるという性格は、自己自身に由来するとしてもかまわない。一般的に言って、動かされるのであれば、少なくとも動かされているかぎり、不変ではない。だが、動かすのであれば、動かすかぎり、不変のまま動かすのでなければならない。それでは、どこから不変であるという性格を得たのであろうか。じっさい、自己自身に由来するのは、動かされることだけなのか、同じ全体において不変かつ動かされることなのかどちらかである。しかし、端的に不変であることをどこから得るのであろうか。[R36] 端的に不変であるものからではないだろうか。ところで、これは不動の原因であった。したがって、われわれは自動者に先立って不動のものを措定しなければならない。

[2.7. 知性から純粹に統一化されたものへ]

それでは、不動のものが最勝義の始原であるか考察しよう。して、どうしてそれが可能であろうか。というのも、自動者が自動というありかたでもつすべての性格を、不動のものは不動のありかたでもつからである。なぜなら、前述の理由から、自動者が第一のものであることはできないのであって、自動者のうちの個々の要素はなんらかの自動者であるから、それら個々のものに先立って、対応する個々の不動者がなければならないから

である。私の主張をより明確に表現するために、他のことは擱いて、三つのものについて論を進めることにしよう。つまり、自動的な魂のうちには、少なくとも存在・生命・認識に関するものという三つが認められ、その各々は明らかに自動的である。なぜなら、たしかに、その全体は自動的な全体だからである。同様にまた同じ理由によって、これら個々の自動者に先立って、対応する個々の不動者がある。したがって、これら三つの形相の不動の充溢があることになる。そこで、それらは分散しているが、自動者 {である魂} のうちで相互に結びついているのか、結びつきが完全であって、それらのうちではいかなる区分もないのかのどちらかである。だが、その場合、個々のものはそれ自身だけでみると自動者であるが、不動者でもあることは決してないだろう。しかし、自己自身にとどまり、不動のものがまた、それぞれ {に対応して} なければならない、というのも、個々の自動者は第一のものではなかったからである。さらに、自動者のうちの区分に先立って、不動者のうちに区分が必然的に存在しなければならないだろう。それゆえ、不動者は一かつ多であり、統一化されていると同時に区分されているのであって、まさにこれをわれわれは知性とも名づけたのである。だが、明らかに知性のうちでは本性上、統一化されたものは区分されたものに先行し、より高貴である。というのは、つねに区分は統一を必要とするが、逆に統一は区分を必要としないからである。さて、知性は対立者ぬきの統一状態をもっていない。じっさい、知性的な形相全体が一樣に、区分されたものと本質的に結びついているからである。したがって、ある点で統一化されているものは、端的に統一化されているものを必要とするのであり、他のものとともにあるものは、それ自身だけであるものを必要とし、分有によってあるものは、原初的存在においてあるものを必要とするのである。というのもじっさい、知性は自己存立的であるから、自己自身を統一化されたものであると同時に区分されたものとして——だから、両方の側面で——導出するのである。したがって、統一化されたものという側面では、端的にひたすら統一化されたものによって導出されるの

であろう。それゆえ、形相づけられるものより前に、多に先立つ一なる凝集のうちに多を含む境界なきもの、諸形相に区分されていないもの——われわれがまさに知性と言い、[R37] 知者たちが存在者と呼んだ——がある。

[2.8. 純粹に統一化されたものから一へ]

それでは、ここで立ち止まって息をつき、存在者が求められている万物の始原であるのかどうか議論することにしよう。して、じっさい、存在者を分有しないものがなにかあろうか。同様に、なんであれ存在するかぎり、少なくとも存在者そのものより劣っているのである。否、もし存在者が統一化されたものであるならば、一に後続し、一を分有して統一化されたものとなったのであろう。一般的に言って、もし一と存在者をべつのものだと考えた場合、仮に存在者が一に先立つとしたならば、一を分有しないことになってしまうだろう。そうして、存在者は多でしかないことになり、しかも、無限倍の無限定者となるだろう。もし一が存在者とともにあり、存在者も一とともにあるならば、これらは同列であるか、相互に隔たっていて、二つの始原があることになるのか——この場合、すでに述べられた不合理が帰結するだろう——、相互に分有し合い、これら両者からなる第三者の二つの要素ないしは部分になるだろうが、これら両者を結びつけるものはなんであろうか。たしかに、一は一なのであるから、存在者を自己自身と一体化させるのであれば——こう言うことも可能であろうから——、一は存在者を自己自身に呼び、還帰させるために、存在者に先立って活動しているのであろう。したがって、一は存在者に先立ち、それだけで自律的に存立したということになる。また、より単純なものはつねに、より複合的なものに先行する。だから、一と存在者は同様に単純であって、二つの始原であるのか、両者からなる一つの始原があり、それが複合的であるかのいずれかである。すると、その始原に先立って、単純にして完全に非複合的なものがあることになる。そして、これは一であるか—でないかのどちらかである。そして、もし一でないならば、多であるか無であるかの

いずれかである。しかし、「無」が「全面的な空虚」を意味するならば、無益なことを表していることになろう。他方、もし「語りえぬもの」を意味しているのであれば、それはともかくも単純なものですらないであろう。もし多であるならば、単純ではないだろう。というのも、単純なものは多を除去することによって、多ならざるものであることを意図しているからである。して一般的に、一よりも単純な始原を思い描くことは不可能である。したがって、どんな場合でも一は存在者に先行する。

以上の議論から離れて、上昇の論をとりあげるために、統一されたもの——それはなんと呼ばれようが、完全に統一化されたものであるが——へと上昇し、そこから一へと、分有するものから分有されるものへと上昇することにしよう。

したがって、一は万物の始原である。プラトンも議論において、この始原に上昇すると、[R38] 他の始原を必要としなかったのである。というのも、この語りえざる始原は、言論の始原でもなければ、認識の始原でもないからである。じっさい、それは生命の始原でもなく、存在者の始原でもなく、もろもろの一の始原でもなく、端的に万物の始原であり、あらゆる概念を超えたところに位置している。まさにそれゆえに、プラトンはこの始原についてなにも明らかにすることなく、一から一そのものを除いた他の万物を否定した。たしかに、かれは最後には一であることを否定したが、一は否定しなかった。さらに、否定そのものも否定したが、一は否定しなかった。名前も思惟の対象であることもあらゆる認識も否定した。この上なにをひとは語りえようか。存在者全体も、あらゆる存在者——統一化されたものであれ、統一的なものであれ、無限と限定という二つの始原であれ——も否定した。しかし、少なくともこれらすべてのものの彼方にある一に関しては、決してどこにおいても、いかなるしかたでも否定しなかった。それゆえ、また『ソフィステス』篇においても、プラトンは始原を存在者に先立つとし、『国家』篇においては、あらゆる実体を超える善としたのである。だが、それにもかかわらず、一だけは残しておいたのである。

[2.9. 一者から語りえざるものへ]

さて、一は可知的であり、語りうるものであるのか、不可知であり、語りえぬものであるのか、ある意味ではそうであるが、べつの意味ではそうでないのかのいずれかである。というのは、明らかにひとは、一について否定を通して語ることができようが、肯定によっては語りえないからである。そしてまた、単純な認識によっては可知的であるが、複合的認識によっては全面的に不可知である。それゆえ、否定によってすら把握されない。一般的に言って、一として措定されるかぎり、措定によって存立するものの頂点なので、なにかべつのしかたで措定されるものどもと、ある意味で連携するのである。しかしながら、一には語りえず、不可知で、非連携、非措定という性格が大きい。これらの反対の性格もかすかに現れているが、前者の方が後者に優っているのである。だが、反対のものがなく混合していないものの方が、混合したものより、どんな場合でも先在する。じっさい、優れた性格は一において原初的存在にしたがってあるのか——すると、どうしてかの地に反対の性格も同時にあるのだろうか——それとも、分有にしたがってあるのかのどちらかである。後者の場合、よそから、つまり当の性格をもった第一のものから到来したことになるだろう。したがって、一にさえ先立って、端的かつ全面的に語りえず、非措定、非連携で、いかなるしかたでも思念の及ばないものがあることになる。まさにそれを目指して、これまでの論は、明瞭この上ないものどもを経て、これらと万物の究極なるものの間にあるなに一つ落とさず、上昇してきたわけである。

[3. 完全な諸世界を通っての遡源]

だが、以上、もろもろの固有な性格を通じてわれわれは進んできたが、統一化されたもの、一、語りえぬものといった第一の諸始原の偉大さ、完璧さ、万物を包括するという性格をいまだ示していない。[R39] われわれはできるかぎり、その探求にも向かわなければならない。

[3.1. 自動者から不動者と統一化されたものへ]

それでは、第一の完璧なものを取りあげてみよう、それは神々自身が、見えざる可知的・統一的で、語りえざる完璧さを示すために、{|われわれの|} 感覚にも提供したものである。それゆえ、この世界はわれわれが見るように、完全なものどもからなり、完全なのである。もっとも、われわれが見るのは、その可感的な面なのであるが。だが、明らかに、われわれのうちにあるものどもは、世界のうちにも前もって存立している。じっさいに、世界は物的なものとか、物的なもの——それ自身で存在せず、基体のうちにあるのだから——の基体となるもののような、われわれのうちの劣ったものをもつのではないし、優れたものをもつでもない。より完全なしかたでそれらであるのだから⁽⁷⁾。

したがって、世界は世界にふさわしい本性をもつだろう、つまり、上下に動かすのではなく、回転させる本性を有するのである。たしかに、これは世界にとって本性的な運動である。

さて、世界はそれより優れた生命、つまり植物的な生命をも有するだろう、もちろん、成長させ、養い、（ここで脱線して言及するには及ばないべつのしかたによるのでなければ）いかほどか消長して生成消滅する、{|自己と|} 類似のものを産出する生命ではなく、形相と数においてつねに本性上それにふさわしい充足と成長——成長しつつある成長ではなく、すでにすっかり成長しおえた成長——を維持し実現する生命である、さらにまた、この生命は固有の照明の産出——それらをすでに産出しおえた産出——を実現する。まさにこういったことをかの地で {|この地と|} 類比的に行い、維持しているのである。

次にまた、世界は非理性的魂、すなわち、ひとびとが言うように感覚的

(7) ὁν τελειότερος は一部A写本にしたがい、一部ウェスタリンクの校訂にしたがって ὦν τελειότερον と読む。

魂のみならず、感覚対象を内側で支配する天的な、つねに神々にふさわしく秩序だった表象力も、かの地ではべつのしかたで気概的・欲望的である欲求的な魂ももつだろう。欲望的であるかぎり、神的な無為を喜び、生き物の永続的なこちよい状態にあり⁽⁸⁾、気概的であるかぎり、宇宙としての生き物に本性上ふさわしい完全で荘嚴な超越性に喜びを見出しているのである。

さらにまた、もし人間が理性的動物であり、思考する魂に依存するものであるならば、世界も一層高次なしかたでそのようなものであることは確実である。したがって、世界は真に自動的で指導的な原因ももっていることになる。それゆえ、その世界が行なう円環運動は自然的のみならず、選択的でもあり、明らかにつねに秩序だっており、固有の目的から逸れることなど決してない。じっさい、このことは宇宙の運行を観察する術もまた指し示しているとおりなのである [R40]。

さて一方で、自動的な活動がときに応じて異なりながら、己固有の転化にしたがって同一の円運動を繰り返すとしておこう。だが他方で、つねに同一であり、同一のものにおいてあり、同一のものをめぐり、同一のものに向かつており、異なりゆくもののうちでまったく異なることなく、転化するものにおいて転化せず、動くものにおいて静止しているという性格を、はて、なにが万有に与えるのであろうか。というのも、自動的な魂は動かすと同時に動かされるのであるから、転化する活動を行なうからである。すると、どこから世界に不動であるという性格が来たのであろうか。もし世界が永続的であるならば、{その原因は} あらゆる点でつねに不動であるものであるし、もし世界が最古の生き物であるならば（これもまた当面そういうことにしておこう…）、{その原因は} その時間のうちで異なりゆくことなく、つねに同一の関係で同様にとどまっており、円運動の一なる秩

(8) リュエル版で20行目（ビュデ版では58頁10行目）の $\kappa\alpha\iota$ (dis) を $\kappa\alpha\tau'$ に読み替える。

序と一なるしかたで、同一のものから同一のものへ回転するものである。じっさい、もし世界がまったく不動の原因に結びついていないとしたら、これほどの長い時間のうちで、<どうして> いかなる転化も、いかなる変容も蒙らないことがあろうか。したがって、万有においても自動者は、世界に固有の秩序と不動の生命を与える不動者に依存せねばならなかったのである。

さらに、万有の魂は、世界内のもののうちで第一のものであるから、つねに完全であり、つねに幸福である。ところで、万有の魂はこの性格を自己自身から得たのではなく（転化するものを存立させたのであるから）、己に先立って座する不動の原因を分有したのである。というのは、つねに秩序づけられており、均衡しているという性格を自動性にしたがってもっているのだとしたら、おそらく人間の魂もまたつねに完全であることになってしまうであろうから。というのも、人間の魂は当然のこと自動的であり、不死であり、永続的に運動するものではあるが、不動のものから遠く隔たっているゆえに、転化する活動においてつねに変容しないということにはならないからである。もし一般的に自動者に先んじて不動者があることが示されたのであれば、世界の自動者の前にも、世界に先立つ不変の管理機能に固有な、世界の不動者が先行するのではなければならない[R41]。それはちょうど各々の神的な生き物に先立って、その各々と固有性に対応した不動者があるようなものである。

しかしそれはともかく、多くの疑念を含む以上のことにいま時間を費やさないように、自動的な全体に先立って不動の全体を指定しておこう。というもたしかに、より劣ったものが全体的で、より優れたものが部分的であることはないからである。したがって、自動的な世界に先立って、不動の世界があることになるだろう。同じ理由から、分割された世界に先立って、凝集的・統一的な世界があるが、これは分割状態にあるいましがた不動と言われた多数化された世界の万物の統一状態である、もしこう言うてよければ、一層不動なのであるが。

[3.2. 統一化されたものから一へ]

その隠れた世界秩序から一そのものへわれわれは上昇した。君は最小の一とか、一なる形相、一なる知性、一なる神のような、ある一つの固有性格とか、多なる神々、あらゆる神々だけを思い浮かべることなく、むしろ、なにか途方もなく大なる一、端的な一そのもの、己から派生する万物を包括するというより、万物に先立つ一自体にしたがったその万物に他ならないものを思い浮かべるがよい。隠れた世界と称するものより、その世界は一層語りえぬものである。これたるや、もはや世界とすら呼びえないのであり、区分なき“万物・一”である。本当のところ、万物ですらなく、万物をそれ固有の全き単純性でもって包括する、万物に先立つ一である。

[3.3. 一から語りえぬものへ]

一がこれほど大なるものであるならば、語りえないものについても、一挙に万物の一なる語りえざる包括であると推測すべきである、その語りえざること、一ですらなく、包括ですらなく、存在せず、語りえないのではないほどなのである。さあ、この包括についてのわれわれの性急な論は、その向こう見ずな熱意に対するご寛恕を神々に乞いつつ、区切りとしておこう。

